

リーダーシップを考える

NHKは、「日本人はなぜ戦争へと向かったのか」というテーマで4回にわたりスペシャル番組を放映しました。

その4回目は「開戦・リーダーたちの迷走」という、昭和20年12月8日の日米開戦から遡ること200日間の日本のリーダー達の迷走ぶりを、克明に捉えたものでした。

かつて、日本は、何故無謀な戦争に突入したかについて、A B C D包囲網によって生きるすべを失った日本が止むを得ず戦争を選択し、その結果、日本人だけで300万人以上が亡くなり、敗戦という結果で終わった、と理解をしてきました。

つまり、事の善し悪しは別として、国家の意思として戦争を選択したものと理解していましたが、NHKの放送を見て、実は決断なき戦争への突入だったことを知り、ある種の虚脱感を感じてしまいました。

この番組では、1941年5月22日（開戦前200日前）の連絡会議から始まり、開戦まで幾度となく会議が開かれながら、ついに責任ある決断が出来なかった様子が描かれています。

1941年当時の内閣は近衛第二次内閣の時代でしたが、近衛総理はもとより陸軍にも海軍にも、本気でアメリカと戦争出来ると考えていたリーダーはいなかったようです。当時の日米の国力差が既に80倍を超えていることをリーダー達は知っており、戦争遂行能力はないことを理解していたと思われます。

同じ頃、ヨーロッパではヒットラードイツの勢力が伸張する中、強いリーダーシップのもとで難局を乗り切ろうとしていました。一方、日本にお

いては、突出したリーダーはおりませんでした。日本における最高の政策決定機関である連絡会議では、総理といえども方針を決定する権限は持っておりませんでした。このため、議論はすれどもまとまらず、結論先送りを繰り返す結果となったのです。

総理、陸・海軍指導部三者がいずれも自ら責任を持って判断しようとせず、誰かが日米開戦は不可能だといひ出すのを待っていた。なし崩しで戦争に突入していったとすれば、国民が被ったあの甚大な被害は何のためだったのかということになるでしょう。

戦争は、回避するチャンスがありましたが、問題を先送りし続ける中で、そのタイミングを失し最悪の結果を招いたといえます。

この番組の中で、日米開戦が回避できなかったのは、当時の日本のリーダーに部下である軍の兵士を説得し、国民を説き伏せるだけの力がなかったためであるとしています。

時のリーダー達は、何を守ろうとしたのでしょうか。

選択肢を列挙するだけで決断しない、命がけて国民の命や財産を守ろうとしない、そうしたリーダーしか持たない国民は不幸であると思います。

また、この番組の中で登場した、歴史家のジョン・ダウン氏は「人が死ねば死ぬほど兵は退けなくなる。リーダーは決して死者を見捨てることを許されない、という死者の負債はあらゆる時代に起きている」と述べています。

日中戦争で既に20万人の兵の命が大陸で失われていたという現実には重いものがあり、得るものがないまま大陸から撤退するという決断をすることは非常に困難であったと思います。しかしながら、そうした重たい決断をなすために、国のリーダーはあるべきではないでしょうか。

(塾頭 吉田 洋一)